

死者はどこへ

—ヘブライ語聖書における死者の居所の諸相とその変遷— (下)

小林 洋一

(上) の内容¹

序

I 死者の居所としてのシェオール (陰府)

1. シェオール (陰府) の同義語

- ① 大地, 地
- ② 墓穴
- ③ 穴
- ④ 地の下, 下の地
- ⑤ 滅び

2. シェオールの位置, 所在 (トポグラフィー)

- ① 地下の水の中
- ② 地下の最下層
- ③ 墓と同義語?

3. シェオールとはどのようなところか

- ① 闇
- ② 沈黙 (無音)
- ③ 塵がある
- ④ 門がある
- ⑤ 全ての生きものが集まる場所
- ⑥ 忘却の地
- ⑦ 蛆や虫がいる
- ⑧ 満杯になることがない
- ⑨ 仕事, 企て, 知恵, 知識がない
- ⑩ 戻って来られない
- ⑪ 神との交わりがない

4. シェオールにおける死者の状態

- ① 亡霊, 死霊として存在する
- ② やがて消える?

以下は (上) の続きである。

1 「死者はどこへ—ヘブライ語聖書における死者の居所の諸相とその変遷— (上)」は『西南学院大学神学論集』第67巻第1号 (2010.3), 1-17 に所収。

Ⅱ ヤハウエとシェオール（陰府）

（上）では、ヘブライ語聖書においてシェオール（陰府）がどのような形象及び観念で捉えられていたかについて概観した。この（下）では、そのシェオールとヘブライ語聖書の神、ヤハウエとの関係について見てみたい。（上）で見たように、ヘブライ語聖書のシェオールの形象及び観念の大部分は、当時の古代中近東の諸民族と共有されていた神話的・宇宙論的・観念的世界観に基づくものである。但し、エジプトの『死者の書』や『ギルガメシュ叙事詩』等のシェオールの詳細な描写と比較すると、ヘブライ語聖書のシェオールの描写は驚くほど貧弱である。それは、ヘブライ語聖書の神、ヤハウエが、生者の神であって、死者の神ではなかった、という神信仰とも関係していたと考えられる。死者の神ではないとは、一つには、死者が死者礼拝を通してヤハウエの支配領域を冒し、ヤハウエの権威に挑戦することを避けるが故に、ヤハウエが死者の運命と関わるのが避けられたことを意味している²。そのような状況について、H. W. ヴォルフは、イスラエルにとってシェオールは「神学的真空状態」であったと説く³。しかし、下記で見るように、そのようなシェオールの「神学的真空状態」は、いつまでも続いたわけではない。その真空状態はやがて埋められ、イスラエルにおけるシェオールのイメージが変容することとなる。

この（下）では、まずは、シェオールの「神学的真空状態」について概観し、次にヤハウエとシェオールの関係について、それがどのような変遷を経ることになったのかを見てみたい。

2 （上）注49参照。

3 H. W. ヴォルフ（大串元亮訳）『旧約聖書の人間論』（日本基督教団出版局，1983），219。G. フォン・ラート（荒井章三訳）『旧約聖書神学Ⅰ イスラエルの歴史伝承の神学』（日本基督教団出版局，1983），363-364は、この「神学的真空状態」をヤハウエ信仰における死の非神話化、非神聖化に起因すると見る。

1. シェオールの神学的真空状態

(上)では、たとえ、参照章句がヤハウエとシェオールの関係について言及していた場合でも、論述の整理上、それについて、いちいちコメントすることをあえて避けてきた。しかし、すでにいくつかの章句において、いわゆる「神学的真空状態」が描写されていた。たとえば、シェオールは、神との関係が断たれるところ、即ち、一般的に、古くから、ヤハウエはシェオールのことに関知せず、死者の運命に対して関心も配慮も示さない、また、シェオールは、神に感謝し、賛美することもできない場所と考えられており、シェオールのそのような状況は、たとえば、(上)で取り扱った、詩編88編には、苦悩として取り上げられていた。

汚れた者と見なされ 死人のうちに放たれて 墓 (קִבְרוֹ) に横たわる者となりました。あなたはこのような者に心を留められません。彼らは御手から切り離されています。(詩88：6)⁴

新共同訳は、「あなたはこのような者に心を留められません。」と訳しているが、ここには、「再び」、「もはや」を意味する עוֹד があり、この訳は「あなたはこのような者に再び (もはや) 心を留められません。」のように עוֹד を生かした訳の方がよいであろう⁵。なお、「御手」は、神の力、支配を意味する。

あなたが死者に対して驚くべき御業をなさったり 死霊 (רְפָאִים) が起き上がって あなたに 感謝したりすることがあるでしょうか。(詩88：11)
墓の中 (בְּקִבְרוֹ) であなたの慈しみが 滅びの国で (בְּאֶרֶץ חַיָּתוֹן) あなたのまことが 語られたりするでしょうか。(詩88：12)

4 聖書及び外典(続編)の引用は、(上)同様、特に断らない限り『聖書 新共同訳』(以下、「新共同訳」)による。なお、章句の下線は筆者。

5 『聖書』(以下「口語訳」)は、その訳において、この עוֹד を生かして「あなたが再び心にとめられない者のように、」と訳出している。

詩編88編は、シェオールを神との交わりのないところとするのであるが、それは、詩編6編でもまた同じである。

死の国へ (תּוֹמָת) 行けば、だれもあなたの名を唱えず 陰府に入ればだれもあなたに感謝をささげません。(詩6：6)

「あなたの名を唱えず」(אֵינִי) は「あなたを記憶(ザーハル)せず」とも訳せる⁶。さらに、

わたしが死んで墓(קֶבֶר)に下ることに 何の益があるでしょう。塵があなたに感謝をささげ あなたのまことを告げ知らせるでしょうか。(詩30：10)

主を賛美するのは死者ではない 沈黙の国 (אֶרֶץ חַיָּתוּת) へ去った人々ではない。(詩115：17)

預言書にも同様の認識が見られる。

陰府があなたに感謝することはなく 死があなたを賛美することはないので 墓 (קֶבֶר) に下る者は あなたのまことを期待することができない。(イザ38：18)

命ある者、命ある者のみが 今日の、わたしのようにあなたに感謝し 父は子にあなたのまことを知らせるのです。(イザ38：19)

「命ある者」(חַיִּים) は「生きている者」とも訳せる⁷。

6 口語訳「あなたを覚えるものはなく、」参照。

7 口語訳「生ける者」参照。

2. 神学的真空状態の克服

生きている者の神を信じ、死後における神との交わりを顧慮しなかった信仰も、「死を前にして、ただ沈黙」していたわけではなかった⁸。

深い地の底 (מְהַקְרִי אֲרִיץ) も御手の内にあり 山々の頂も主のもの。(詩 95: 4)

「深い地の底」はシェオールを意味する。「御手」は、神の力、支配を意味すると取れるので、この詩編では、シェオールが神の支配の中にあることが詠われている。この章句は、「神学的真空状態」の克服というよりも、人が生きている間、神の支配から逃れられないことを強調しているようにも見える⁹。しかし、ヤハウエは、世界の創造者として、明らかにシェオールを司ることもできる神であることが言われていると見てよいであろう¹⁰。

上記の詩編95編の年代を想定することは難しい¹¹。しかし、8世紀の預言者アモスには次のような神の言葉が見られる。

たとえ、彼らが陰府に潜り込んでも わたしは、そこからこの手で引き出す (מִקְרִי) ¹²。たとえ天に上っても わたしは、そこから引き下ろす。(アモス 9: 2) ¹³

8 ヴェルナー・H. シュミット (山我哲雄訳) 『歴史における旧約聖書の信仰』(新地書房, 1985), 541.

9 O. カイザー・E. ローゼ (吉田泰他訳) 『死と生』(ヨルダン社, 1981), 78-80 参照.

10 Cf. Marvin Tate, *Psalms 51-100* (Word Biblical Commentary 20; Dallas, Texas: Word Books, Publisher, 1990), 498, 501.

11 Ibid., 500 は、詩編 95 編の成立年代として初期捕囚後を想定している。

12 「引き出す」と訳されているヘブライ語は、後述する מִקְרִי (ラーカハ) である。

13 Hans Walter Wolff (tr. W. Janzen et al.), *Joel and Amos* (Hermeneia; Philadelphia: Fortress Press, 1977), 340 は、アモスが、箴言 15 章 11 節の「陰府も滅びの国も主の御前にある。人の子らの心はなおのこと。」に見られる知恵の伝統に立っていると見ている。

この章句が、シェオールにまで神の手、即ち、神の力、支配が及ぶことを示していることは明らかである。シェオールが神の力、支配が及ぶところであれば、そこはもはや神にとって隠れたところ、秘密のところとはなり得ない。従って、人間がヤハウエに捉えられまいとして、そこに逃げこんだとしても無駄なのである。ヴォルフは、ここに「神学的真空状態」の克服の「新しい使信」が鳴り響いていると見る¹⁴。

箴言15章11節（「陰府も滅びの国も主の御前にある。人の子らの心はなおのこと。」）と同じような言及は同じ捕囚後の知恵文学のヨブ記にも繰り返されている。

陰府も神の前ではあらわであり 滅びの国（יִרְכָּס）も覆われてはいない。（ヨブ26：6）

この章句もまた、ヤハウエの前におけるシェオールの限界性を示している。さらに、（上）で取り上げたヨブのシェオールについての逆説的言及の中にも、死者の居所としてのシェオールの神の前における究極性が失われていることが示されていた。

どうか、わたしを陰府に隠してください。あなたの怒りがやむときまでわたしを覆い隠してください。しかし、時を定めてください。わたしを思い起こす時を。（ヨブ14：13）¹⁵

H. シュミットはヨブ記14章13節の解釈に付随して、シェオールへの神の支配の拡張について次のように洞察している。

14 ヴォルフ『旧約聖書の人間論』、220。

15 「ヨブは神の怒りが届かない（支配領域外の）シェオールに神が自分を連れて行って神の怒りが止むときまで隠して欲しいと言っている」というヨブの驚くべき逆説については、（上）注39参照。

しかし死の限界は、その不動性と究極性をいくぶんか失っている。人間はいまや、生けるものにとってどうすることもできない領域で、敢えて考え、信じ、そして希望をもちはじめたのである。このような考えの結果、神の支配領域は冥界の住人たちのもとまで拡張された¹⁶。

ヨブ記には、さらに次のような章句も見られる

わたしは知っている わたしを贖う方は生きておられ ついには塵の上に
立たれるであろう。(ヨブ19:25)

この皮膚が損なわれようとも この身をもって わたしは神を仰ぎ見るで
あろう。(ヨブ19:26)

並木浩一氏によれば、上記ヨブ記19章25-26節について、ヨブは生きているうちに神の応答が望めず、むしろシェオールで、はじめて神との親しい交わりが可能となるのだと、シェオールについての、それまでの常識を覆すような期待に全てをかけたのである¹⁷。

年代が断定できない詩編139編には、大胆にも神がシェオールにもいる、と告白されている。

天に登ろうとも、あなたはそこにいまし 陰府に身を横たえようとも 見よ、あなたはそこにいます (שְׂאוֹל הַתְּהוֹמוֹת)。(詩139:8)

さて、シェオールの形象及び観念の枠組みの変化は、どのような事柄を契機に起ったのであろうか。ヤハウエが、死者礼拝を排して、排他的に自己礼拝を要求するが故に、死の領域を不浄なものとして、死者の居所との関わり

16 シュミット『歴史における旧約聖書の信仰』、546 参照。

17 並木浩一『ヘブライズムの人間感覚 〈個〉と〈共同性〉の弁証法』(新教出版社、1997)、131。

を避けたとの主張は、ヤハウェだけが神であり、世界の主であるならば、ヤハウェの支配の及ばない領域があってはならない、という観念に突き当たり、ジレンマに遭遇することとなる。死者の居所の「神学的真空状態」の克服は、ヤハウェ信仰に内在する相克の神学的格闘に他ならなかったはずである。ヴォルフが語るように、イスラエルの人々は、この「神学的真空状態」を手探りしながら進んで行ったと想定してよいであろう¹⁸。ただ、ヤハウェに対する唯一神教的信仰の高まりと共に、もしヤハウェだけが神であるならば、あるいは、ヤハウェが全世界の創造主ならば、ヤハウェの支配はシェオールにも及ぶはずである、という確信が生まれるのは必然的帰結であったとも言える¹⁹。

ただ、ここで注意したいことは、そのような確信が生じたとしても、シェオールがヤハウェのメインの関心及び支配地となることはなかったということである。そのことは、たとえ、「神学的真空状態」が克服されたとしても、そのシェオールがディテールに描かれることがなかったことから明らかである。ヤハウェのメインの支配地は、あくまでも生ける者の住む「この世」なのである。

なお、ヘブライ語聖書内において、たとえば、同じ詩編において、ある詩編はシェオールの「神学的真空状態」を示し、他の詩編はその克服を示すという具合に、その形象及び観念が錯綜としていることが瞥見される。即ち、そこには、ただ単に、シェオールをめぐる通時的変遷が示されているだけでなく、異なる形象及び観念の共時的共存もが示唆されているのである。その意味で、ヘブライ語聖書のシェオールをめぐる形象及び観念は、編集されて統一されたわけではなく、多様性の中に放置されていたと言える。

さて、ヘブライ語聖書には、シェオールの「神学的真空状態」克服との関

18 ヴォルフ『旧約聖書の人間論』, 219.

19 この「確信」は、あくまでも推測の域を出ないものである。脇本平也『死の比較宗教学』（現代の宗教3；岩波書店、1997）、86によれば、宗教における超越の思想が高まると、内容的に他界観・来世観が越えられることとなる。なお確固とした唯一神教的信仰の始まりということでは、イザ45：5を根拠に捕囚中とする説が一般的である。

連で「シェオールからの引き上げ」という注目すべき言及が見られるので、それについても少し目を向けてみたい。

3. シェオールからの引き上げ

ヨブ記ではシェオールに下れば、もはや戻ることができないと言われている。

密雲も薄れ、やがて消え去る。 そのように、人も陰府に下れば もう、上ってくることはない (יַעֲלֶה)。 (ヨブ7：9)

しかし、ヘブライ語聖書の他の箇所にも目を転ずれば、そのシェオールから、神が人を引き上げる希望が語られている。たとえば、バト・シェバとの間の子が亡くなって嘆くダビデの言葉「だが死んでしまった。断食したところで、何になろう。あの子を呼び戻せようか。わたしはいずれあの子のところに行く。しかし、あの子がわたしのもとに帰って来ることはない。」(サム下12：23)を紹介する同じサムエル記で、次のような章句があるのは興味深い。

主は命を絶ち、また命を与え 陰府に下し、また引き上げてくださる (וַיַּעֲלֵה)。 (サム上2：6)

この「陰府からの引き上げ」は、ヤハウエの全能の力を告白していると思われるのであるが、具体的に何を意味しているのかは明らかではない。次のような場合には、それは、死の危機からの救出と、潜在的な死と考えられていた病気からの回復を想定していると見てよいであろう。

わたしの神、主よ、叫び求めるわたしを あなたは癒してくださいました。(詩30：3)

主よ、あなたはわたしの魂を陰府から引き上げ (הֶעֱלִיתָ) 墓穴に下ることを免れさせ わたしに命を得させてくださいました。(詩30：4)

それでは、次のような章句はどうであろうか。

しかし、神はわたしの魂を贖い 陰府の手から取り上げて (יָדַי?) くださる。(詩49:16)²⁰

ここでは、「わたしの魂を贖い」と「陰府の手からの取り上げ」が同義となっているのであるが、「陰府の手」は、シェオールSheolの力、支配を意味している。H. リングレンは、ここでは神はシェオールよりも強く、命を与えることが出来る、という確信が表現されていると見ている²¹。

この詩編49編は、いわゆる知恵の詩編とも呼ばれるもので、11節の「人が見ることは 知恵ある者も死に 無知な者、愚かな者と共に滅び 財宝を他人に遺さねばならないということ。」は、コヘレトの言葉「賢者も愚者も、永遠に記憶されることはない。やがて来る日には、すべて忘れられてしまう。賢者も愚者も等しく死ぬとは何ということか。」(コヘレト2:16)に近似している。しかし、先の詩編49編16節は、コヘレトの言葉2章16節に見られない希望の表明となっていることは見逃せない²²。

実は、この「取り上げる」あるいは「取る」と訳されている **לָקַח** (ラーカハ) は、天に行ったという例外者であるエノクとエリヤにも使われている言葉である。

20 カイザー・ローゼ『死と生』, 116 は、16 節を後代の付加で、死に対する「新たな解決」の提示と見る。しかし、コリーン・マクダネル&バンハード・ラング (大熊昭信訳)『天国の歴史』(大修館書店, 1993), 36 のように、後代の付加とせず、詩人が新しい教えを知りつつ、提示していると取ってもよいと思われる。

21 H・リングレン (荒井章三訳)『イスラエル宗教史』(教文館, 1976), 282. 詩編 16:10 参照。

22 なお、カイザー・ローゼ『死と生』, 112 は、コヘレト 3:20 「すべてはひとつのところにいく。すべては塵から成った。すべては塵に戻る。」を、「彼らの骨は地中にやすらい、霊は深い喜びを味わい、…」(ヨベル 23:31)に見られるような死後の命についての新思想(但し、カイザー・ローゼは、この新思想を黙示的思想とは言っていない)に対抗して述べられたものと考えている。村岡崇光訳『ヨベル書』『聖書外典偽典 4 旧約偽典 II』(教文館, 1975), 90 参照。なお、コヘレトの黙示思想批判については、注目すべき、大友聡「黙示思想と伝道の書—序論的考察—」『神学』62号(2000), 86-103 参照。

エノクは神と共に歩み、神が取られた (לָקַח) のでいなくなった。(創世 5 : 24)

エリコの預言者の仲間たちがエリシャに近づいて、「主が今日、あなたの主人をあなたから取り去ろう (לָקַח) となさっているのを知っていますか」と問うと、エリシャは、「わたしも知っています。黙っててください」と答えた。(列下 2 : 5)

彼らが話しながら歩き続けていると、見よ、火の戦車が火の馬に引かれて現れ、二人の間を分けた。エリヤは嵐の中を天に上って行った (יָרַעַל)。 (列下 2 : 11)

エリヤの昇天に際しては、列王記下 2 章 5 節では、「取り去る」を意味する「ラーカハ」が使われ、同 2 章 11 節では、上記、ヨブ記 7 章 9 節、サムエル記上 2 章 6 節、詩編 30 編 4 節に出て来た「上る」を意味する עָלָה が使われている。そして、ここでは、天に「上る」(עָלָה) が、神の「取り去る」(לָקַח) の同義語となっており興味深い。

さて、エノクとエリヤの「取り上げ」は、シェオールからの取り上げではない。地上からの取り上げであり、しかも死ぬ前の取り上げである。さらに言えば、エリヤの場合には天に上ったと記されているが、エノクの場合には、どこに行ったのかは書いていない²³。ヴォルフは、「取り上げる」(ラーカハ) という観念は、神の信実のゆえに、ヤハウエとの交わりが死によっても断絶しないという静かな確信の表明と捉えている²⁴。

以上のような、「引き上げる」、「取り上げる」の考察から、シェオールか

23 紀元前 2 世紀のヨベル書の 4 : 23 では、エノクは「豪壮なエデンの園」に移されたと記されている。村岡崇光訳「ヨベル書」『聖書外典偽典 4 旧約偽典 II』(教文館, 1975), 36.

24 ヴォルフ『旧約聖書の人間論』, 222. なお、リングレン『イスラエル宗教史』, 283 は、エノクとエリヤは全く例外者として描かれているので、この言葉をもってイスラエルの標準的な彼岸期待の表明とみることはできない、と釘をさしている。

らの「引き上げ」, 「取り上げ」は、死という現実を見つめつつ、それが最後ではない、という信仰が披瀝されているものと捉えてよいであろう。ヴォルフによれば、ヤハウエの前には、ただこの世の生活か、死者の世界での影のような生活か、そのどちらかという二者択一があるばかりではない。第三の可能性として、ヤハウエとの持続する命の交わり（それがどのようなものを指すかは置いておくとして）が存在するのである²⁵。

ともあれ、シェオールからの「引き上げ」, 「取り上げ」という観念は、ヤハウエとの交わりの待望の表現であり、この交わりは肉体の死によっても中断されないと考えられていたと見てよいであろう。詩編73編に次のような言葉が出て来る。

あなたは御計らいに従ってわたしを導き 後には栄光のうちにわたしを取られるであろう (תִּקְחֵנִי)。(詩73:24)²⁶

栄光のうちに「取られる」とは、何を意味し、それがどこへ取られるのかは明らかではない。

わたしの肉もわたしの心も朽ちるであろうが 神はとこしえにわたしの心の岩 わたしに与えられた分 (חֶלְקִי)。(詩73:26)

ヴォルフによれば、「分」(ハラク)とは、生活の基盤、生活費等を意味する(詩16:5参照)。死んでも神自身はその人の生活費となるので、その人の命は終わりとはならないという意味である²⁷。この言葉もまた死後においても維持される神との交わりを期待している言葉と捉えてよいであろう²⁸。

25 ヴォルフ『旧約聖書の人間論』, 222.

26 カイザー・ローゼ『死と生』, 116は、24節後半を、原文にはなじまない後代の付加による死に対する「新たな解決」と読むのであるが、直前の23節「あなたがわたしの右の手を取ってくださるので 常にわたしは御もとにとどまることができる。」等の関連を考えて、ここだけを、あえて後代の付加とする必要はないように思う。

27 ヴォルフ『旧約聖書の人間論』, 222-223.

4. 黙示思想における希望

これまで、シェオールが神の支配の及ぶところとなり、そこからの「引き上げ」の希望も語られるようになることについて見て来た。希望とは無縁であったシェオールにも希望の光が差し込んで来たのである。そのような希望が、捕囚後に発展した黙示思想でさらに押し進められることとなる²⁹。

イザヤ書には、捕囚後に付加されたとされる黙示思想の色濃い24-27章があり、その中の26章19節には、次のような章句が出て来る。

あなたの死者が命を得 わたしのしかばねが立ち上がりますように。 塵の中に住まう者よ、目を覚ませ、喜び歌え。 あなたの送られる露は光の露。あなたは死霊の地 (אֶרֶץ רְפָאִים) にそれを降らせられます³⁰。

「塵」も「死霊の地」もシェオールを意味する。「目を覚ませ」ということで、死者が眠っている者と考えられていたことを示し、シェオールに住んでいた「死霊」(レファイーム)に奇跡的变化(死者の甦り)が起ることが示唆されている。ダニエル書12章2節はその変化の最終段階を示していると言える。

多くの者が地の塵 (אֶרֶץ עָפָר) の中の眠りから目覚める (וַיִּקְוִצוּ)。ある者は永遠の生命に入りある者は永久に続く恥と憎悪の的となる。(ダニ12: 2)

28 ヴォルフ『旧約聖書の人間論』, 224 は、死後のヤハウェとの持続的交わりの存在がいくら言及されていたとしても、死は神から遠く離れたままである、あるいは、死は神に対する独立した対抗勢力ではない、という死についてのヘブライ語聖書の根本原則は、放棄されたわけではない、と注意を喚起している。

29 「命に溢れてこの地に住む者はことごとく主にひれ伏し 塵に下った者もすべて御前に身を屈めます。わたしの魂は必ず命を得」(詩 22: 30) の章句をめぐる、H. シュミット『歴史における旧約聖書の信仰』, 546-547 や、ヴォルフ『旧約聖書の人間論』, 237 は、死の克服という黙示文学的認識が新しい形で表現されている、と捉えるのであるが、詩 22: 30 のテキストは毀損が激しくあまり確かなことは言えない。

30 O. カイザー (並木浩一訳)『イザヤ書 13-39 章 私訳と註解』(ATD 旧約聖書註解刊行会, 1981), 362-363 は、この 19 節を後代の付加と見るが、ダニ 12: 2 と、どちらが先に成立したのかは決定出来ないとして、その判断を留保している。

「地の塵」(אֲדָמַת־עָפָר)³¹はシェオールの別名であるが、シェオールから目覚める(יָקִיצוּ)であろう人々はどうなるのであろうか。

目覚めた人々(הַמְשֻׁכָּלִים)は大空の光のように輝き 多くの者の救いとなった人々は とこしえに星と輝く。(ダニ12:3)

新共同訳で、2節と3節で、「目覚める」と同じように訳されている言葉は、原文では同じ言葉ではない。2節の「目覚める」(יָקִיצוּ)は、眠りからの一般的な目覚めに用いられる言葉であるが、3節の「目覚めた人々」の「目覚める」は、「熟慮する、洞察を得る」等の意味をもつ言葉である。口語訳は、この3節の「マスキリーム」を「賢い者」と訳していた。この訳の方がよいと思う。新共同訳のような訳では、2節と3節のヘブライ語が同じ言葉であるかのような誤解を与える可能性がある³²。ともあれ、12章2節に「ある者は永久に続く恥と憎悪的となる。」とあるが、ヘブライ語聖書には、「地獄」が出て来ないとすると、それはどのような状態のことなのであろうか。それは、永遠の生命の反意語だとすれば、永遠の死(?)を意味するのであろうか³³。

B. ラングによれば、「光のように輝き」とは、天使のようになることであり、また「目覚める」とは、「肉体をもつ地上の生活への復帰ではなく、死の闇から天なる神の住まいの光りの中に移されることである。」³⁴ここに、遂

31 「地の塵」(אֲדָמַת־עָפָר)の字義通りの訳は「塵の地」となるはずであり、その方がシェオールの形象に相応しいと思われる。「塵」も「地」もシェオールの形象として用いられていることについては、すでに(上)で見た。「地の塵」という訳は、創世3:19に、死が塵に戻ることに表現されていることの影響かも知れない。

32 新改訳は、「思慮深い人々」、岩波訳は、「見識ある者たち」と訳している。村岡崇光訳『旧約聖書 XIV ダニエル書 エズラ記 ネヘミヤ記』(岩波書店、1997)、54。

33 W. S. タウンナー(高柳富夫訳)『現代聖書注解 ダニエル書』(日本キリスト教団出版局、1987)、254は、12:2-3にある言語的不明瞭さを、復活という概念が、非常にラディカルかつ大胆であったため、未だ神学的反省が未成熟であったことに起因すると推測している。

34 B. ラング(加藤久美子訳)『ヘブライの神 旧約聖書における一神格の肖像』(教文館、2009)、107。

に、エノクやエリヤという特殊な人々ではなく、紀元前2世紀に、アンティオコス四世エピファーンネスの圧政と迫害にもかかわらず、信仰を守り通した無名の人々（殉教者）が、神と天的存在者の住まいである天に達するのを見る。ただ、いつそのようなことが起るのかという「時点」については何も述べられていない。ともあれ、迫害という宗教的・政治的事態がシェオールをめぐる形象及び観念の変容に大きな後押しをしたと見てよいであろう。

このダニエル書の、一般的に「復活信仰」と言われているものは、捕囚時代にユダヤ人が接触したであろうペルシアのゾロアスターの影響を受けて登場してきたと考えられている³⁵。ただ、外的刺激という以外に、実際どのように、どれほどの影響を受けたのかは一般的に考えられているほど明らかではない³⁶。古代イスラエルが外的刺激を受け入れるにしても、「復活信仰」を生み出す諸前提や素地が存在していなければ、それは困難なことである。そのような諸前提や素地として考えられるものの一つは、ヤハウエが死やシェオールよりも強いという確信であり、もう一つは、カナンに死して甦る豊穡神の形象からの借用に求められるかもしれない³⁷。その関連で、たとえば、イスラエルの民の偽りの悔改めの儀式の典礼の言葉と見なされている³⁸、ホセア書6章1-2節に次のような言明がみられる。

「さあ、我々は主のもとに帰ろう。主は我々を引き裂かれたが、いやし我々を打たれたが、傷を包んでくださる。(ホセア6:1)

二日の後、主は我々を生かし 三日目に、立ち上がらせてくださる。我々は御前に生きる。(ホセア6:2)

35 シュミット『歴史における旧約聖書の信仰』, 533 参照。コリーン・マクダネル&バンハード・ラング『天国の歴史』, 32 は、ゾロアスターの影響で、肉体の復活を唱えた最初のユダヤ人として、エゼキエルを挙げている(エゼ37章参照)。

36 カイザー・ローゼ『死と生』, 125-131 参照。

37 リングレン『イスラエル宗教史』, 283 参照。

38 Cf. Hans Walter Wolff (tr. G. Stansell), *Hosea* (Hermeneia; Philadelphia: Fortress Press, 1974), 116-119.

ヨナ書でも魚の腹（シェオール）の中に滞在した日数として3日目が述べられている。

さて、主は巨大な魚に命じて、ヨナを呑み込ませられた。ヨナは三日三晩魚の腹の中にいた。（ヨナ2：1）

言った。苦難の中で、わたしが叫ぶと 主は答えてくださった。陰府の底から（מִבְּטֶן אֲדָמָה），助けを求めると わたしの声を聞いてくださった。（ヨナ2：3）

ヨナは陰府で生きており、神に向かって叫ぶのである。

リングレンは、この三日目は祭儀的カナンの典礼に遡るとして、イスラエルの「復活信仰」の基盤としてのカナンの影響を重視している³⁹。

なお、「復活信仰」のヘブライ語聖書後の外典における変遷について付記すれば、外典中、紀元前2世紀成立のマカバイ記二のみが義人の目覚めた者が永遠の命を受けるという復活について述べている⁴⁰。

息を引き取る間際に、彼は言った。「邪悪な者よ、あなたはこの世から我々の命を消し去ろうとしているが、世界の王は、律法のために死ぬ我々を、永遠の新しい命へとよみがえらせてくださるのだ」（マカ二7：9，cf. 7：14，36，12：43-45）

ただ、注意すべきことは、このような「復活信仰」が見られる一方で、マ

39 リングレン『イスラエル宗教史』，284。しかし、シュミット『歴史における旧約聖書の信仰』，533は、死せる神（バアル）の帰還が人間の運命と同一視されることはなかったとしている。なお、メソポタミアの神話、「イナンナの冥界下り」では、3日は、地上から冥界へ下るのに要する時間となっている。五味亨他訳「イナンナの冥界下り」『筑摩世界文学大系I 古代オリエント集』（筑摩書房，1985），29 参照。

40 リングレン『イスラエル宗教史』，369 参照。

カバイ記と同時代の知恵文学である外典シラ書には、シェオールに関して「神学的真空状態」的言及が見られることである⁴¹。

陰府で、だれがいと高き方を賛美するだろうか。生きている者と違って、だれが感謝の言葉をささげるだろうか。(シラ17:27)

死んで、もはや存在しない人からは、感謝の言葉も消えうせる。生きていて健やかなときにこそ、人は主を賛美する。(シラ17:28)

これは、ヘブライ語聖書の中のみならず、それ以後も、依然としてシェオールをめぐって多様な形象及び観念が共存していたことを示すものである。

結 語

ヘブライ語聖書において、死者と生者の混在はない。死者は死者の世界へ、生者はこの世にいるのである。そして生者は、死んで死者の居所とされていた、シェオール（陰府）に行く。シェオールは、穴、墓、地の下、滅び等とも呼ばれ、そのトポグラフィは、天、地、地下の三層の世界の地下（ある場合には水の中）にあると考えられていた。そのシェオールの特徴は、闇、沈黙、塵、忘却。蛆がおり、戻って来られない。そして多くの場合、神との交わりが断たれる等の陰鬱なイメージをもって描かれている。

このシェオールにおいて死者は、レファイム（亡霊、死霊）として存在すると考えられていた。そこで永遠に存在するのではなく、やがて消え去るとも考えられていた。このようなシェオールの形象及び観念は、イスラエル独自のものではなく、イスラエルが、古代中近東の諸民族と共有する神話的・宇宙論的・観念的世界観の産物である。但し、ヘブライ語聖書におけるシェオールの描写は、エジプトの『死者の書』やバビロンの『ギルガメシュ

41 ベン・シラの、死後の世界についての否定的考えや、その反復活思想に関しては、村岡崇光訳「ベン・シラの知恵」『聖書外典偽典2 旧約外典II』（教文館、1977）、71-73 参照。

叙事詩』等と比較するとき驚くほど貧弱なものであることが判明する。それは、イスラエルのヤハウエへの信仰と無縁ではない。

ヤハウエとシェオールとの関係は最初消極的なものであったと考えられている。なぜなら、ヤハウエは生ける者の神であり、死せる者の神とは考えられていなかったからである。その意味では、シェオールは「神学的真空状態」にあった。しかし、やがて世界創造神的信仰や唯一神的信仰の高まりの中で、ヤハウエの支配はシェオールにまで拡大されることになる。

次の進展は、シェオールにある者の「引き上げ」への期待である。それはヤハウエとの交わりが死によっても断絶するわけではない、との信仰告白でもある。その進展は、黙示思想の影響と政治的・宗教的迫害の後押しの下、いわゆる「復活信仰」として開花していく。その復活信仰は、死者が天に向けて動き出す萌芽となったと考えられる。

ヘブライ語聖書における死者の居所をめぐることは、通時的には、一般的知見と宗教的洞察、希望と懐疑の相克を経ての変遷が見られ、共時的には、多様な形象及び観念の共存が見て取れる。ヘブライ語聖書は完結した書ではない。あくまでも未来に開かれた書である。ヘブライ語聖書における死者の居所をめぐる形象及び観念もまた未来に開かれている。

補遺：新約聖書における死者の居所

I 死者の居所としてのゲヘナ（「地獄」）とハデス（「陰府」）

新約聖書には、死者の居所としてゲヘナ（ギリシア語でゲエンナ〔*γέεννα*〕）とハデス（ギリシア語で〔*ᾗδης*〕）という二つの形象及び観念が見られる。ヘブライ語聖書のシェオールは、この両者に発展・変容しつつ受け継がれていると言える。新共同訳は、ゲヘナを「地獄」、ハデスを「陰府」とそれぞれ訳出している⁴²。

42 『舊新約聖書』（日本聖書協会、1982）、『聖書 新改訳』（新改訳聖書刊行会、1970）、新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』（岩波書店、2004）は、「ゲエンナ」を、それぞれ、「ゲヘナ」と訳出している。また、上記三書のうち新改訳のみが「ハデス」を、「ハデス」とし、他の二書は「黄泉」と訳出している。

D. ワトソンによれば、ゲヘナ(「地獄」)は最後のさばきの後で、悪しき者が留まる永遠の場所であり、一方、ハデス(「陰府」)は、悪しき者が、死、復活、そして最後のさばきの間に留まる一時的な場所である。黙示録20章13-14節では、ハデス(「陰府」)が、死者をさばきに差し出すので、死者は、最後のさばきである火の海に投げ込まれることになっている。さらに、ゲヘナ(「地獄」)は、からだと魂の両方を受入れるが(マタ10:28, cf. ルカ12:5), ハデス(「陰府」)は魂だけを受入れるとなっている(使徒2:27, 31)⁴³。

新約聖書はゲヘナ(「地獄」)の苦しみについては何も描写しない。ただ、ルカ福音書16章23節-24節では、ハデス(「陰府」)で、金持ちが「さいなまれ」, 「炎の中でもだえ苦しんで」いると記されている。さらに言えば、ゲヘナからの復活については何も言及されないが、ハデスからの復活についての言及が使徒言行録2章31節に見られる⁴⁴。これを見ただけでも、ヘブライ語聖書同様、新約聖書においても死者の居所の諸相が錯綜としていることが伺える。

1. ゲヘナ(「地獄」)

新共同訳の新約聖書が、ギリシア語のゲヘナ(γέεννα)を「地獄」と訳していることについては既に触れた。ゲヘナは新約聖書に12回現われる(マタイ5:22, 29, 30, 10:28, 18:9, 23:15, 33, マルコ9:43, 45, 47, ルカ12:5, ヤコブ3:6)⁴⁵。並行記事であることを無視して数だけ言えば、福音書のマタイが一番多く(7回), マルコ(3回), ルカ(1回), 他はヤコブ書(1回)のみで極めて限定された書にのみ現われる。このゲヘナは新約聖書と旧約外典(エズラ記〔ラテン語〕2:29, 7:36⁴⁶)以外には、

43 Daune F. Watson, "Gehenna," in *The Anchor Bible Dictionary* II (New York: Doubleday, 1999), 926-928.

44 Cf. *ibid.*

45 新共同訳では、ペトロ二2:4の「タルタローサス」(ταρταρώσας)が「地獄に引き渡し」と訳されているが、ここには、ゲヘナの言葉はない。タルタロスは古代ギリシア人が考えた死後人間が行く最下位の場所を指す。即ち、ゲヘナである。「地獄」『新聖書辞典』(いのちのことば社, 1985), 538-539 参照。

46 新共同訳のエズラ記(ラテン語)の2:27は「ゲヘナ」となっているが、7:36は「地獄」となっており紛らわしい。

セプトゥアジントにも現れない⁴⁷。ヘブライ語聖書には、「地獄」という言葉は出て来ないが⁴⁸、新共同訳が「地獄」と訳出するゲヘナはヘブライ語聖書から来ている言葉なので、いささかややこしい。このゲヘナは、ヘブライ語聖書「ゲー ヒンノム」(「ヒンノムの谷」)から来ており、「ゲー ヒンノム」は、アラム語では「ゲー ヒンナム」となり、それが「ゲヘナ」となった⁴⁹。それはヨシュア記15章8節、18章16節、それに、ネヘミヤ記では、地名として現れる。たとえば、ネヘミヤ記11章30節には、次のように記されている。

ザノアとアドラムおよびそれらの村々、ラキシユとその耕地、アゼカとその周辺の村落である。彼らはベエル・シェバからヒノムの谷(גֵּהֶנָּה)までの地に定住した。(ネヘ11:30)

しかし、他の箇所では、古代ヒンノムの谷で幼児犠牲が捧げられ、火によって焼かれる場所として知られるようになる。

王はベン・ヒノムの谷⁵⁰にあるトフェトを汚し、だれもモレクのために自分の息子、娘に火の中を通らせることのないようにした。(列下23:10, cf. エレ7:31, 19:4-6, 32:35, 歴代下28:3, 33:6)

47 Cf. Watson, "Gehenna," 926-928.

48 「地獄」を、罪を犯した者や悪を行った者が懲罰や苦しみを受ける他界とするならば、ダニ 12:2の「ある者は永久に続く恥と憎悪の的となる」に「地獄」の思想の片鱗を見ることもできるかも知れない。なお、ヴォルフ『旧約聖書の人間論』, 212は、「シェオールに下降する」(創世 42:38, 44:29, 31, イザヤ 38:10, 17(18の誤りであろう), 詩編 9:15, 17(15, 17は18の誤りであろう), 16:10, 49:9, 15, 88:3-6, 11, 12, 箴言 1:12)が、ただ人生の終わりとしての埋葬のことを意味しているに過ぎない、としつつ、シェオールに下ることに苦難を強調しようとの意図があることも認めている。Ibid., 239 n. 13.

49 Cf. Watson, "Gehenna," 926-928. 現代ヘブライ語では、「地獄」のことをגֵּהֶנָּה「ゲヒンノム」と言う。

50 「ベン・ヒンノムの谷」は省略なしの「ゲー ヒンノム」の正式名である。

後に、そこは町の汚物を捨てるごみ捨て場、動物の死骸や罪人の死体も焼かれる場所となった。ヒンノムの谷は、しばしば、呪われた谷、または「淵」として言及され、火による悪しき者たちの終末的さばきの場を表すようになった（エノク26-27章，54：1-6，90：24-27）。少なくとも紀元後1世紀までには、あらゆる悪しき者を火によってさばく場所としてのゲヘナの比喩的理解が生じ、そのようなことから罪人の永遠の滅びの場所、そして「地獄」を示す場となった、と考えられている⁵¹。

しかし、わたしは言うておく。兄弟に腹を立てる者はだれでも裁きを受ける。兄弟に『ばか』と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』と言う者は、火の地獄（**τὴν γέενναν**）に投げ込まれる。（マタイ 5：22）⁵²

ゲヘナは、ヘブライ語聖書にはなかったシェオールの審判の場所としての形象を専ら担うことになる⁵³。

2. ハデス（「陰府」）

ハデスは新約聖書に10回出て来る（マタ11：23，16：18，ルカ10：15，16：23，使徒2：27，31，黙示1：18，6：8，20：13，14）。これまた並行記事であることを無視して、数だけを言えば、福音書ではマタイ（2回）、ルカ（2回）だけであり、他は使徒言行録（2回）、黙示録（4回）である。黙示録が4回で一番多くなっている。ゲヘナ同様極めて限定された書にのみ現われる。シェオールは、セプトゥアジントでは「ハデス」と訳された。ギリシア語で、死者の居所は「ハデス」と言われていたので、この訳は当然のことであったと言える。

ハデスが新共同訳では、「陰府」と訳されていることについては既に触れた。このハデス（**ᾗδης**）は、元来、ギリシアの宗教概念では、陰府の神の

51 Cf. Watson, "Gehenna," 926-928.

52 その他の地獄の火については、マタイ 18：9，マルコ 9：43，ヤコブ 3：6 参照。

53 但し、ホセ 13：14 に、シェオールの刑罰的ニュアンスを認めることは可能かも知れない。

名であったが、やがてハデス神が支配する陰府そのものを意味するようになった。このハデスは、ヘブライ語聖書のシェオールと同じく全ての死者が行き、陰のように存在する悲しみと闇の世界が考えられていた。しかし、そこが終りなきさばきを受ける場と考えられるようになったのは後の時代のことである⁵⁴。

新約聖書では、ルカ福音書16章25節と黙示録20章13-14節のみが、ハデスが審判の場、あるいは刑罰の場であることを示唆している。

しかし、アブラハムは言った。『子よ、思い出してみるがよい。お前は生きている間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に悪いものをもらっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前はもだえ苦しむのだ。(ルカ16：25)

海は、その中にいた死者を外に出した。死と陰府も、その中にいた死者を出し、彼らはそれぞれ自分の行いに応じて裁かれた。(黙示20：13)

死も陰府も火の池に投げ込まれた。この火の池が第二の死である。(黙示20：14)

R. ボウカムによれば、復活と永遠の生命信仰の勃興は、シェオール／ハデスの概念に重要なインパクトを与えることになった。復活は、神が死者に命を付与するためにハデスから引き上げる終末的行為と理解されたからである。その最初期の時代では、陰のような存在がハデスから戻って肉体的生命を与えられるという考えや、天で天使たちと共に住む霊としての存在となることが期待されたりした。その結果、ハデスが、死者が終末に起る復活の時までの一時的居所となったのである⁵⁵。

54 Cf. Richard Bauckham, "Hades, Hell," in *The Anchor Bible Dictionary* III (New York: Doubleday, 1999), 14-15.

55 Ibid.

さらに、この復活の概念が死者のさばきと結びつくようになり、そのさばきの日に、正しい者は、永遠の生命を受け、悪しき者は永遠の滅びまたは苦しみを受けると考えられるようになった⁵⁶。

紀元前2世紀の成立とされる偽典の黙示思想のエノク書において、エノクは、太陽の沈む世界の最西の端の山の上に連れていかれ、四つの穴を示される。そこでは、正しい人、殉教者、地上ですでにさばきを受けた罪人と、そうでない罪人等の4種類の死者がさばきの日まで置かれている(22-27章)⁵⁷。そのエノク書では、シェオールがヒンノムの「谷」の形象と結びついて言及されている。

その西に、これより低い、高くない山がもうひとつある。その麓に、両者の間に谷が横たわっている。また、この三つの(山の)端に、深い、乾いた谷がほかにもいくつかある。(26:4)⁵⁸

わたしは地の別な方向に身を転じて見つめていると、火の燃えさかる深い谷がそこに目にとまった。(54:1)

しかし、そこは、未だ誰もいない。エノクは天使からその「谷」について次のような説明を受ける。

そのとき、わたしについていた聖なるみ使いのひとりウリエルが、わたしに答えて言った。「この呪われた谷は、永遠に呪われた者のためのものである。神に対してけしからぬことを口にする者はことごとくここに集められ、また彼の栄光に対して聞くにたえないことを言うものが集められ、ここが彼らの仕置場になるのである。」(エノク27:2)

56 Ibid.

57 Ibid. 当時、すでに死者の靈魂を中間状態で生かしておくという考えがあった。カイザー・ローゼ『死と生』, 121 参照。

58 村岡崇光訳「エチオピア語エノク書」『聖書外典偽典4 旧約聖書偽典Ⅱ』(教文館, 1975), 228. 以下エノク書の訳は同書による。

新約聖書時代のユダヤ教文書には、最後のさばきが始まる前でさえ悪しき者に対する永遠のさばきが、ハデスにおいてすでに始まっているという考えが示され、ハデスには、時には、伝統的にゲヘナにおいて悪しき者の苦しみのために取っておかれた火が現れる（シラ21：9-10，エノク63：10）⁵⁹。

無法者の集まりは、麻屑の束。彼らは、燃え盛る火となって絶え果てる。罪人の歩む道は、平坦な石畳であるが、その行き着く先は、陰府の淵である。（シラ21：9-10）。

彼らはまた彼ら（自身）に向かって言うであろう。「わたしどもの魂は不法の資財に飽きている。しかし、これは、わたしどもが陰府の烈しい炎に落ちこむのを防いではくれない」。（エノク63：10）

最終段階で、ハデスは悪しき者のさばきの場となる。一方、正しい者は、死においてパラダイスか天に行くことになる⁶⁰。

やがて、この貧しい人は死んで、天使たちによって宴席にいるアブラハムのすぐそばに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。そして、金持ちは陰府でさいなまれながら目を上げると、宴席でアブラハムとそのすぐそばにいるラザロとが、はるかかなたに見えた。そこで、大声で言った。『父アブラハムよ、わたしを憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水に浸し、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます。』（ルカ16：22-24）

59 Cf. Bauckham, “Hades, Hell,” 14-15.

60 Ibid.

Ⅱ キリストとハデス（「陰府」）

1. キリストのハデス下り

キリストの時代のユダヤ人の一般的な考えでは、全ての死者はハデスに下るというものであったので、キリストもその死により、ハデスに下ったというのは当然の帰結となる。そしてキリストが復活したのは、「死者の中から」であったのである。たとえば、マタイによる福音書は、復活について、次のように言っている。

それから、急いで行って弟子たちにこう告げなさい。『あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる。』確かに、あなたがたに伝えました。」（マタイ28：7，cf. マタイ17：9等）

もちろん、と言ってよいかどうか分からないが、明らかに、キリストのハデス下りと矛盾するテキストも見られる。キリストが、共に十字架につけられていた犯罪人の一人に向かって言ったとされる言葉は驚くべきものである。

するとイエスは、「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。（ルカ23：43）

「今日」とは、どのように解釈されるべきなのか⁶¹。楽園に直接行くとは、エノクやエリヤのようにか？新約聖書の中で、これも、キリストの死後の居所に関して、その形象及び観念が錯綜としている例の一つと捉えてよいであろう。

ところで、キリストのハデス下りとの関連でよくペトロの手紙一3章19節

61 「今日」（σήμερον）を無視しない注解者は、この「今日」という言葉とイエス・キリストのハデス下りとの整合性に特別な困難さを感じている。たとえば、K. H. レングストルフ（泉治典他訳）『ルカによる福音書 翻訳と註解』（NTD 新約聖書註解刊行会，1976），572 参照。

が取り上げられるが⁶²、注解者の中には、その関連を疑問視する者もいる。

そして、霊においてキリストは、捕らわれていた（**φυλακῆ**）霊たちのところへ行って（**πορευθεῖς**）宣教されました。（1ペトロ3：19）

N. ブロックスは、この章句の解釈の困難さを認めつつも、この章句がキリストのハデス下りを語っているとすることに疑問を呈している。それは、降下の時点を明らかにしておらず、「獄」（**φυλακῆ**）と、そこに「行く」（**πορευθεῖς**）と言われているだけで、地下世界に降下という表現を用いていないからだとする⁶³。それでは、キリストはどこに行ったのか。ブロックスは、霊たち（「天使たち」と取り）の獄の場所として、キリストの高挙に際しての、「路程にあった一つの通過点」が考えられている可能性を示唆している⁶⁴。それ故に、ブロックスは、ペトロの手紙一3章19節との関連で議論となる、同4章6節の「死んだ者にも福音が告げ知らされたのは、」の「死んだ者」を3章19節の「霊たち」とは異なるものと解釈する⁶⁵。

2. キリストのハデスからの引き上げられ

キリストの死がハデスへ下った、と形象されるならば、キリストの復活は、ハデスからの「引き上げられ」と形象されてよいであろう。パウロは、申命記30章13節の「海のかなたにあるものでもないから、『だれかが海のかなたに渡り、わたしたちのためにそれを取って来て聞かせてくれれば、それを行

62 キリストがハデス滞在中に死者に説教したことについては、紀元後2世紀後半のペトロ福音書10：41-42参照。小林稔訳「ペトロ福音書」『聖書外典偽典6 新約外典I』（教文館、1988）、154。さらに、シェオールでの死者に対するキリストの宣教活動については、紀元後4世紀頃の作と言われる新約外典ニコデモ福音書17-27章参照。田川建三訳「ニコデモ福音書」『聖書外典偽典6 新約外典I』（教文館、1988）、208-219。

63 N. ブロックス（角田信三郎訳）『EKK 新約聖書註解XXI ペテロの第一の手紙』（教文館、1995）、252-253。なお、この1ペトロ3：19-20/4：6をめぐるキリストのハデス下りについての詳しい後世史については、同書、247-257参照。

64 Ibid., 236-237.

65 Ibid., 236.

うことができるのだが』と言うには及ばない。」をほのめかしつつ、

また、「『だれが底なしの淵に下るか』と言ってもならない。」これは、キリストを死者の中から引き上げることになります。(ローマ10：7)

と語り、キリストの死人の中からの復活を、「底なしの淵」(ハデス)からの引き上げと描写している。

使徒言行録は、ハデスからの引き上げ(復活)を、神によるハデスからの解放と捉える。即ち、使徒言行録2章24-32節は、ヘブライ語聖書からの引用またはほのめかし(詩編16：8-11, 132：11等)によって、復活を朽ち果てる肉体的崩壊と、神によるハデスの力(死の苦しみ)からの解放と解釈している⁶⁶。

しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。イエスが死に支配されたままでおられるなどということは、ありえなかったからです。(使徒2：24)

あなたは、わたしの魂を陰府(ᾅδην)に捨てておかず、あなたの聖なる者を朽ち果てるままにしておかれない。(使徒2：27)⁶⁷

マタイ福音書12章40節は、魚の腹の中はハデスを表し、ヨナが魚の腹の中から現れたのは、神の死からの解放を意味する、というヨナのユダヤ教の解釈の伝統を用いて、ヨナに起ったことをキリストの死と復活の予型としている⁶⁸。

つまり、ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、

66 Cf. Richard Bauckham, "Descent to the Underworld," in *The Anchor Bible Dictionary* II (New York: Doubleday, 1999), 145-159.

67 使徒2：27の根拠として、2：31で、詩16：10が引用されている。

68 Cf. Bauckham, "Descent to the Underworld," 145-159.

大地の中にあることになる。(マタイ12:40)

3. キリストのハデス支配

ハデスから引き上げられたキリストは、ヘブライ語聖書のヤハウエのように、今やハデスを支配する者となった。それは、その死と復活において、キリストが死とハデスを支配する力を得たことを含意している⁶⁹。黙示録は、そのことを、キリストがハデスの門を開く鍵をもつ者となった、ということ⁷⁰で表明している。

わたしは、その方を見ると、その足もとに倒れて、死んだようになった。すると、その方は右手をわたしの上に置いて言われた。「恐れるな。わたしは最初の者にして最後の者、(黙示1:17)

また生きている者である。一度は死んだが、見よ、世々限りなく生きて、死と陰府の鍵を持っている。(黙示1:18)

黙示録に従えば、ハデスからの解放という神的権能⁷⁰は、今やキリストに属することになったのである。一般的に、新約聖書では、キリストの死と復活にその関心を集中するあまり、キリストのハデス下りのみならず、ハデスから解放された死者はどうなるのかについて、それほど関心が払われていない、という印象を受ける⁷¹。ここに、紀元後1世紀後半の「預言者イザヤの殉教と昇天」にみられるような解釈—キリストは義人をハデスから救い出してパラダイス、即ち天国に導く—を生む余地を残すことになったと考えられる⁷²。

69 Ibid.

70 紀元前1世紀の知恵の書16:13は、ヤハウエについて、「あなたは生死をつかさどる権能をもち、人を陰府の門まで連れ行き、また連れ戻される。」と称えている。

71 Cf. Bauckham, “Descent to the Underworld,” 145-159.

72 Ibid.

そのとき、多くの義人が彼とともにのぼるが、彼らの霊は、主なるキリストが彼らとともにのぼられるまではその衣装をもらって彼とともに昇らない。彼が第七の天にのぼられたとき、そのときこそは、彼らもその衣装と玉座と冠をいただくであろう』(預言者イザヤの殉教と昇天 9 : 17-18)⁷³

参考文献

- Andersen, F. I. and D. N. Freedman. *Hosea: A New Translation with Introduction and Commentary*. The Anchor Bible 24; New York: Doubleday, 1980.
- Baukhham, Richard. "Descent to the Underworld." in *The Anchor Bible Dictionary* II. New York: Doubleday, 1999, 145-149.
- . "Hades, Hell." in *The Anchor Bible Dictionary* III. New York: Doubleday, 1999, 14-15.
- Boling, Robert G. *Judges: A New Translation with Introduction and Commentary*. The Anchor Bible; New York: Doubleday, 1975.
- Brown, Francis S. R. Driver and C. A. Briggs. *Hebrew and English Lexicon of the Old Testament with an Appendix Containing the Biblical Aramaic*. Oxford: Clarendon Press, no date.
- N. ブロックス (角田信三郎訳) 『EKK 新約聖書註解 XXI ペテロの第一の手紙』教文館, 1995.
- H. クルーゼ「天地創造」『新聖書大事典』キリスト新聞社, 1984.
- Fox, Michael V. *Qohelet and His Contradictions*. Sheffield: Almond Press, 1989.
- フランシスコ会聖書研究所『聖書 原文校訂による口語訳 創世記』サンパウロ, 1992.
- 五味亨他訳「イナンナの冥界下り」『筑摩世界文学大系 I 古代オリエント集』筑摩書房, 1985.
- Gottwald, N. G. *The Hebrew Bible-A Socio-literary Introduction*. Fortress Press, 1985.
- 「地獄」『新聖書辞典』いのちのことば社, 1985, 538-539.
- M. ジョーンズ編 (左近義慈監修・佐藤陽二訳) 『図説旧約聖書の歴史と文化』新教出版社, 1973.
- O. カイザー・E. ローゼ (吉田泰他訳) 『死と生』ヨルダン社, 1981.
- O. カイザー (並木浩一訳) 『イザヤ書 13-39 章 私訳と註解』(ATD 旧約聖書註解刊行会, 1981.
- 小林稔訳「ペトロ福音書」『聖書外典偽典 6 新約外典 I』教文館, 1988.
- B. ラング (加藤久美子訳) 『ヘブライの神 旧約聖書における一神格の肖像』教文館, 2009.

73 村岡崇光訳「預言者イザヤの殉教と昇天」『聖書外典偽典別巻補遺 II』(教文館, 1995), 196-197.

- Lewis, T. J. “Dead, Abode of the.” in *The Anchor Bible Dictionary* II. New York: Doubleday, 1999, 101-105.
- コリーン・マクダネル&バンハード・ラング (大熊昭信訳) 『天国の歴史』 (大修館書店, 1993).
- 村岡崇光訳 「エチオピア語エノク書」 『聖書外典偽典 4 旧約聖書偽典 II』 教文館, 1975.
- . 「ヨベル書」 『聖書外典偽典 4 旧約偽典 II』 教文館, 1975.
- . 「ベン・シラの知恵」 『聖書外典偽典 2 旧約外典 II』 教文館, 1977.
- . 『旧約聖書 X IV ダニエル書 エズラ記 ネヘミヤ記』 岩波書店, 1997.
- D. Michel+柴田有 「せかいぞう 世界像 Weltbild」 『旧約新約聖書大事典』 教文館, 1989, 677-678.
- 並木浩一 『ヘブライズムの人間感覚 〈個〉と〈共同性〉の弁証法』 新教出版社, 1997.
- 大林浩 『死と永遠の命 そのキリスト教的理解と歴史的背景』 ヨルダン社, 1994.
- 小川英雄 『古代オリエントの宗教』 エルサレム宗教文化研究所, 1985.
- 大友聡 「黙示思想と伝道の書—序論的考察—」 『神学』 62号 (2000), 86-103.
- K. H. レングストルフ (泉治典他訳) 『ルカによる福音書 翻訳と註解』 NTD 新約聖書註解刊行会, 1976.
- H. リングレン (荒井章三訳) 『イスラエル宗教史』 教文館, 1976.
- ヴェルナー・H. シュミット (山我哲雄訳) 『歴史における旧約聖書の信仰』 新地書房, 1985.
- Seow, C. L. *Ecclesiastes: A New Translation with Introduction and Commentary*. The Anchor Bible 18c; New York: Doubleday, 1997.
- Smith, M. S. “Rephaim.” in *The Anchor Bible Dictionary* V. New York: Doubleday, 1999, 674-676.
- S. Schulz+月本昭男・山我哲雄 「よみ 陰府 黄泉 Totenreich, Unterwelt」 『旧約新約聖書大事典』 教文館, 1989, 1261.
- 田川建三訳 「ニコデモ福音書」 『聖書外典偽典 6 新約外典 I』 教文館, 1988.
- Tate, Marvin. *Psalms 51-100*. Word Biblical Commentary 20; Dallas, Texas: Word Books, Publisher, 1990.
- W. S. タウナー (高柳富夫訳) 『現代聖書注解 ダニエル書』 日本基督教団出版局, 1987.
- 月本昭男訳 『ギルガメシュ叙事詩』 岩波書店, 1996.
- G. フォン・ラート (荒井章三訳) 『旧約聖書神学 I イスラエルの歴史伝承の神学』 日本基督教団出版局, 1983.
- 脇本平也 『死の比較宗教学』 現代の宗教 3. 岩波書店, 1997.
- Watson, Daune F. “Gehenna.” in *The Anchor Bible Dictionary* II. New York: Doubleday, 1999, 926-928.
- H. W. ヴォルフ (大串元亮訳) 『旧約聖書の人間論』 日本基督教団出版局, 1983.
- Wolff, Hans Walter (tr. G. Stansell). *Hosea*. Hermeneia; Philadelphia: Fortress Press, 1974.
- . (tr. W. Janzen et al.). *Joel and Amos*. Hermeneia; Philadelphia: Fortress Press, 1977.